

## 石田 憲 著『ファシストの戦争：世界史的文脈で読むエチオピア戦争』

西, 貴倫  
九州大学大学院法学研究院：協力研究員：政治史

<https://doi.org/10.15017/26305>

---

出版情報：九大法学. 105/106, pp.93-100, 2013-02-28. 九大法学会  
バージョン：  
権利関係：

書 評

石田 憲 著

『ファシストの戦争』

——世界史的文脈で読むエチオピア戦争——

西 貴 倫

一 本書は、国際政治史ならびにファシズムの歴史的展開における画期的な出来事としてエチオピア戦争を位置づけ、「ファシストの戦争」という視座に立って、様々な角度からエチオピア戦争に迫るものである。

著者も意識しているように、イタリア・ファシズムはドイツ・ナチズムと比較すれば、日本では「その担い手さえも知られていない」（二〇三頁）。「ファシストの戦争」であるエチオピア戦争を主題とした研究もまた邦語文献では僅かである。そうした中で、本書は一般読者を意識しつつ、エチオピア戦争の遂行者をとりあげ、この側面からイタリア・ファシ

ズム体制のイメージを巧みに描き出している。

また、本書は複数国の文書館史料や文献に依拠し、「ファシストの戦争」を遂行したファシストだけでなく、「ファシズム」への国際的な対抗者や批判者をもとりあげ、ファシズムに向きあった同時代の雰囲気や鮮やかに描き出している。彼らの活動は一国史の枠をこえた関係史や比較史の枠組みの中に位置づけられており、本書は広い視野を持つ著者ならではの一書であるといえる。

ところで、ここで言うエチオピア戦争とは第二次エチオピア戦争（一九三五―一九三六年）を指す。イタリアは第一次エチオピア戦争（一八八九―一八九六年）に敗退しており、ファシストにとってこの戦争は前世紀の雪辱を果たす機会でもあった。さらにエチオピア戦争をめぐるは国際的反応も大きく、著者によればその意義は単にイタリアの植民地の拡大にとどまらず、最後の植民地獲得戦争として世界史の転換点になったという。また、エチオピア戦争が「ファシストの戦争」であったがゆえに、ファシズム体制にとって、あるいは内外のファシストと反ファシストの双方にとって、重大な変化をもたらしたという。本書が注目するのは、エチオピア戦争のこの側面である（三―四頁）。

歴史的にみて、ファシズムはその運動（「擬似革命」と既存の支配層（「権威主義的反動」）との同盟によって政権を獲得し、体制の形成を試みた。その過程で支配層と妥協し「一度政権が奪取されると疑似革命的 성격は後退」するが、一方で「戦争を通じて『新しい秩序』『新しい人間』の形成という目標は残された独自の思想傾向として突出することになる」（五頁）。著者によれば、イタリア・ファシズムにとってその思想傾向の典型的な発露の場となった戦争こそ、このエチオピア戦争であったとされる。

というのも、エチオピア戦争は、ムッソリーニの政権獲得以来、「社会的ダーウイニズムに基づく戦争賛美を一〇年来続けてきたファシスト・イタリアが、ようやく手にした武闘の機会」（三頁）だったからであるという。また、体制が維持された全期間を通じて華々しい戦果に乏しいイタリア・ファシズムにとって、「エチオピア戦争は少なくともファシストたちが主体的に戦いを主導し勝利したという実感を抱ける唯一の事例であった」（四頁）ことにもよるとされる。

さらにこうした事情とも関連して、イタリア内外のファシズムないし「ファシストの戦争」に抵抗を試みる者、あるいは批判を試みる者にとっても、エチオピア戦争は無視しえな

い契機となったと見られる。

こうした様々な文脈においてエチオピア戦争が占める位置を踏まえて、本書では「ファシストの戦争」を担った（担おうとした）ファシストだけでなく、「ファシストの戦争」に対抗しようとした義勇兵、「ファシストの戦争」からファシズムへの懐疑を引き出すに至った知識人らが取り上げられ、「ファシストの戦争」に向き合った多様な人々の姿が（編年体ではなく）列伝形式で明らかにされる。すなわち、章を追うごとに、とりあげられる主体が「抑圧する側から抑圧される側へ、さらには抵抗する側へ」（二〇五頁）と変化する。また、取り上げられる主体の論理から「侵略と破壊から解放と内省へ」（同）と変化する方向性が示唆される。

これまでに示唆したように、本書は多様な視点から「ファシストの戦争」を描き、多様な文脈に位置づけていく。そうした多様な視点や文脈をすべて取り上げることは、評者の力量をこえる。そこで以下では、各章の内容を概観し、次いで特に本書の大枠をなす多様性の提示に焦点を当て、その特長と論点を提示することにした。

二

本書の構成は次の通りである。

はじめに——エチオピア戦争とは何か——

第一章 サブリーダーたちの戦争

1 幽閉中の「副王」たち

2 「生死の境に生きる」ファシスト

3 「文明」を伝播する司令官

第二章 幻の国際義勇軍

1 「帝国の亡霊」

2 「異形の人々」

3 「未来の同盟者」

第三章 文学から見た戦争——エチオピア戦争と日中戦

争をめぐって——

1 新たなる開放の夢

2 戦場と本国の間

3 同質化から離れて

おわりに

以上のように、本書は三つの章から成り、章ごとに分析対

象が変化している。さらに、章ごとに「イタリア国内から国際社会へとフォーカスを移しつつ、歴史から比較へと対象の分析方法を変えていく」（二六頁）。すなわち、各章はそれぞれ異なる立場の主体——ファシズム体制側の指導者、エチオピア側の義勇兵（志望者）、イタリアの文学者——に焦点をあてるとともに、異なる角度からエチオピア戦争の諸相を多面的に描き出している。

上述の点を踏まえて、分析対象と分析方法に着目しながら各章の内容についても概観しよう。

はじめには本書の議論の前提として、ファシズムの一般的定義における戦争と、イタリア・ファシズムにおけるエチオピア戦争の位置づけ、ファシストの戦争としての性格を際立たせる思想的特徴が述べられる。そのうち、思想的特徴として挙げられるのは「軍事行動主義」・「帝国主義」・「ナショナリズム」である。これらの特徴が、（反発をふくめて）各章の分析対象となる主体に読み込まれていく。

第一章は、ファシスト戦争指導者の群像を描いている。分析対象となる主体はサブリーダー論によって位置づけられる。サブリーダー論はムッソリーニの権力の源泉を対立・競争するサブリーダー間の調整と操作に求めるものである。サ

プリーダの権限は分散・分断され、組織間調整よりも人的働きかけが操作の中心となった(二六頁)。

第一節では、一九二〇年代においてはムツソリーニを脅かすほどの存在であったファシズム体制の創設者たち、「副王」に焦点をあてている。具体的には、「ファシスト大元帥」バルボ、「西面外交の策士」グランディ、「ファシズムの理論家」ボッターイである。彼らは、エチオピア戦争において権力中枢から遠ざけられており、自身の復権、または真のファシズムの実現を求めて、エチオピア戦争遂行の主導権を握ろうと試みたが果たせず、周辺的な地位に「幽閉」された。

第二節では、ムツソリーニと結びつくことで権力を得た体制の「寄生者」たちが取り上げられた。具体的には「功名従軍」スタラーチエ、「ファシスト英雄」ファリナッチ、「絶望」飛行中隊「チャーノ」といった面々である。彼らは地位の向上(または確立)のためにファシズムの称揚する戦士像を自ら体現しようと従軍を志願した。こうしたファシスト義勇兵の自己表現欲求はしばしば常軌を逸して軍事行動を阻害し、正規軍とのあいだに溝を作り出した。

第三節では、正規軍に地位を占めた「奴隷解放者」デ・ポーノ、「現地人の破砕者」グラツイアーニ、「政治家将軍」

バドリオが主な分析対象となっている。植民地獲得という目標よりも自己表現を優先するファシストたちに代わって、彼ら「政治的司令官」が実際の戦争を担った。彼らはファシストのように戦争をスポーツ化しようとはしなかったが、ムツソリーニの要求に応え、文明化を掲げてエチオピア住民の虐殺を指揮(または放任)し、その地位を維持した。

「ファシストの戦争」は、植民地獲得という目標よりも「軍事行動主義」の舞台としての役割が優先された。戦争目的のもとに指導者たちの足並みが揃うことはなかった。と同時に、体制の中心にとどまろうとする限り、どの指導者も体制の論理(ファシストらしくあること)を軸とした政治ゲームに参加せざるを得なかった。

さらに、サブリーダー論の観点からすれば、エチオピア戦争は優秀な(しかし対抗的な)サブリーダーの隔離を終え、ムツソリーニの周辺が追従者で固められた。その結果、サブリーダー間の競争に由来する体制のダイナミズムは消失し、ムツソリーニ自身もサブリーダーの適時任免によって得ていた政策上の選択肢を消失した。

第二章はエチオピア側の義勇軍の群像が描かれる。分析対象となるのは国際義勇兵と義勇兵志願者たちである。その軍

事上の影響は無視できる程度のごく小規模なものだったが、ファシストの義勇兵と対をなす点、当時の複雑怪奇な国際政治状況を反映している点で注目される（「帝国」あるいは「帝国主义」の影響）。また、義勇兵運動がその周辺に与えた影響も考察の対象となる。

第一節では、「さまよえる帝国の使徒」として旧ロシア帝国からの義勇兵、「帝国と帝国主義の狭間」からの義勇兵として旧オスマン帝国地域からの義勇兵、「新旧帝国の相克」を示す旧オーストリア・ハンガリー帝国地域からの義勇兵の三者を取り上げている。これらの地域の義勇兵の動機は、具体的には互いに異なるものの、旧帝国の残照によって性格づけられていた点で共通しており、彼らは「帝国の亡霊」と名づけられている。

第二節では、エチオピアに「『アフリカ人』の希望」を見出した西アフリカの義勇兵運動、「『ニグロ』の共闘」を見出したアメリカ合衆国の義勇兵運動、中小国の連帯を模索しながら「白人」の使節」として冷遇されたベルギーとスウェーデンの軍事使節団を取り上げている。彼らは、具体的な動機では汎アフリカ主義や人種主義であったり、中小国の連帯であったりと異なったものの、ともにエチオピア帝国の利害枠

組みを超えた連携の模索者であり、エチオピア側から見て「異形の人々」であった点で共通していた。

第三節では、「影のエチオピア援助国」として、ナチ・ドイツ（第三帝国）の支援と「義勇兵」を、「有色人種の兄弟帝国」日本帝国の支援運動と政府対応を取り上げている。イタリアの「未来の同盟者」におけるエチオピア支援（あるいは支援運動の生起）は当時の国際政治の合従連衡における人間闘争の微妙な地位を反映している。

こうした義勇兵の試みは、当時の国際政治状況の制約の渦中であってエチオピア戦争の結末を左右することにはなかった。しかし、欧米諸大国への幻滅や国境を超えた連帯の予感とはあとに続く時代の様々な思想や運動の基盤を提供したとされる。

第三章はエチオピア戦争に向き合ったイタリアの知識人を日中戦争に向き合った日本の知識人との対比を通じて描き出し、イタリア本国においてファシズムに対する抵抗の思想的基盤が形成された経緯を明らかにしている。日伊両国は対外膨張に近代化と植民の夢を見た点、早々に幻滅を余儀なくされた点、出版物が厳しい統制を受けた点で共通していた。とはいえ、両国の知識人の戦争イメージと態度については相違

が見られたという。

第一節では、戦争のユートピアを謳い、権力・国家・民族を称揚する直截的で露骨な未来派のマリネットイが、ナイーヴな転向知識人の亀井勝一郎の日本回帰と対比される。次いで、国王を一兵士と位置づける国民的詩人ダヌンツイオの言説と、現役兵が常に農村出身者に偏向した日本の実情を対比し、日本の知識人の抱える「負い目」が指摘される。とはいえ、対英批判と植民地に対する普遍性を欠く解放の論理などについては日伊の知識人は軌を一にするという。

第二節では、戦争との距離感と知識人の戦争叙述の相違が結びつけられる。遠隔の地エチオピアでの戦争はイタリアの知識人にとってはリアリティーを欠いてかえって内在化され、ファシズム体制下の閉塞状況を捉え直す契機になったという(例としてカルロ・レーヴィ)。他方、日中戦争はより身近であったため、日本の文壇はより情緒的に戦争を語ることになったとされる。前線における心象風景もまた、日本の知識人にとっては素朴な実感として語られ、自軍兵士には無批判であるという(例として林芙美子、井上靖)。他方、イタリアのフライアーノは辛辣で冷徹な目線を戦場の出来事にも向けていたとされる。ただし、内地にあった永井荷風の日記に

は戦争への懐疑が見られ、イタリアの民衆同様、日本の民衆にも戦争への懐疑が広がっていたことが確認できるといふ。

第三節では、日伊両国に見られた同質化と相対化、隠遁と抵抗などの異なる言動を取り上げ、各段階に至る転換の質的違いと違いの生じる理由を考察している。キリスト教徒の賀川豊彦の被害者に対する姿勢の劇的な転換(アジアの侵略者としての日本認識がアジアの解放者へと反転)が指摘され、戦後の堀田善衛を手がかりに、体制との断絶可能性の契機が自己の相対化にあることを示唆する。他方、イタリアには連続する抵抗精神を見出す。ファシスト青年急進派からは、エチオピア征服から反帝国主義に目覚め、スペイン内戦に参戦し「赤軍」に寝返る計画さえ浮上し、こうした若者の反抗は世代間の価値観の衝突(労働者や女性の問題)に連鎖してレジスタンスを形成する一潮流となったという。

こうした日伊の違いは敵対する相手を前提とした他者認識の有無に求められる。イタリアの知識人は明確な他者認識の下、自己の一貫性を確立しようとしたのであり、エチオピア戦争を契機とした多様性の発見が反ファシズム運動に新たな地平を開いたとする。他方、日本の知識人は、同質化傾向と「時局」への迎合において、その逆であったという。

おわりにでは、あらためて本書の構成と執筆過程を検証している。例えば「最大の被害者であるエチオピア人は中心におかれなまま、各章の主要登場人物たちが自分たちの物語を一方的に形づくっていた」（二〇一頁）等、本書の課題についても詳細に述べられている。

### 三

以上の本書の概要を踏まえた上で、以下ではその特長と論点のいくつかを指摘したい。

評者がまず本書の特長として挙げたいのは、実に多彩で個性的なファシストやその対抗者が描かれている点である。加えて、こうした主体が様々な文脈で論じられている。「視点の多様性を楽しんでもらえたら」（二六頁）という著者の意図は十分に達せられているであろう。

さらに、多様性の提示にとどまることなく、多様なものの把握のために類型化がなされている点も、あわせて特長といえよう。この特長は特に第一章と第二章に見られる。

第一章で見れば、ムッソリーニのライバルの「副王」、ムッソリーニに利用されることで自らの政治的地位を保持した「寄生者」、実際の戦争を担った「政治的司令官」といったよ

うに、個性的なサブリーダーたちをイタリア・ファシズム体制における地位や役割によって類型化している。この類型化を通して、著者は読者に対するイタリア・ファシズム体制の概括的イメージ——戦争指導の面に限定されるもの——の提供に成功している。

第二章では、幻の国際義勇軍の多様な主体を、出自や立場によって類型化している。すなわち、旧帝国の出身者たちが「帝国の亡霊」として、当事者であるエチオピアから見て異質な人々が「異形の人々」として、イタリアと同盟を結ぶことになる日独の人々が「未来の同盟者」としてそれぞれ類型化される。こうした類型化によって読者はエチオピア戦争がおかれた世界的文脈の脈絡をよりよく理解しうるであろう。こうした特長に限らず、本書は豊富な内容と示唆に溢れており、興味深い論点もまた、あまた引き出すことができる。ここでは特に次の二点をとりあげたい。

一点目は、第一章でサブリーダーの類型化を通じて描き出されたイタリア・ファシズム体制におけるイデオロギーの役割ないし位置づけについてである。特に第一章に関連して、著者は「本章は、ファシスト・イタリアがナチズムと比較していかに『イデオロギー的ダイナミズム』を欠き、日本帝国



の軍部が戦争で徹底した『集團主義』に到達できなかったかを証明するためのものではない。むしろ一九三五年までのファシズム体制が、曲がりなりにも一三年間そのイデオロギーを政治・経済・社会に反映させていたにも拘らず、実質的利益をもたらしなない戦争にいかなる意味を見いだし、その結果としてどのような変化が生じたのかを問題にした」（七五〜七六頁）と述べる。より具体的には、「ファシズム体制にとって戦争は必ずしもイデオロギーを一つの方向に収斂させるものではなかった」（七八頁）とされるのだが、これが「強制的同質化による『戦士の国家』建設が図られていった」（同）ことと並行して起こったことのように述べられている。

この場合、企図された強制的同質化と収斂しなかったイデオロギーとの関係が気になるところである。というのも、本来的には強制的同質化の起点はイデオロギーであるように思われるからである。

二点目は、第三章の日伊比較についてである。この章では、多様性の提示と類型化ではなく（しいて言えば、イタリア型と日本型二類型が示されていると言えなくもないのだが）、ファシズムや「ファシストの戦争」に対する抵抗の思想的基盤を明らかにすることに主眼が置かれているように見える。

そうして本書が明らかにした日伊両国の思想的特徴はひとつの傾向としては理解できなくもないが、こうした傾向が両国の思想状況の中でどの程度の比重を占めたのかについては議論の余地があるように思われる。また、ここでの日伊比較は画期的だが、とりあげられた日伊の文学作品や日記が両国の典型例として比較可能なものなのかどうか、また、比較の前提になっている言論統制の度合いといった状況の異同についても議論の余地があるように思われる。

#### 四

以上、本書の内容を概観し、その特長と論点について述べた。本評では特長とともにいくつかの論点を提示したが、こうした論点は、あえて言うまでもなく、いずれもエチオピア戦争を「ファシストの戦争」として多角的に論じた本書の核心的な意義をいささかも損なうものではない。評者の誤解や誤読に対してはご寛恕を乞うとともに、本書を踏まえたうえでの今後のイタリア・ファシズム研究のいつその深化を期待したい。

（千倉書房、二〇一一年一〇月刊、二七〇頁、三二〇〇円＋税）